

# 悩み・苦痛の逆療法

## 第1部 解脱の真理の発見

### (39) 正しいと我慢と間違った我慢－人格陶冶の道－

私が重工業会社に入社して、勤労部で職長訓練を担当していた頃に、工場の職長で、年配の人がいた。彼は、才能はあったが、人の気持ちを理解せず、皆にひどく嫌われていた。なぜならば利己的だったからである。例えば、部下が電話しているところに彼が入ってきて、自分が所用があると、「その電話、すぐ止めてあけろ」と言って、取ってしまう。

彼と個人的に話してみると、若い時から自分の嫌がられる性格を直したいと非常に苦労してきたという。そのために山を長時間歩いたりもしたが、常に孤独にさいなまれていたということであった。私は、人間は苦労すれば必ず良い結果が現れ、人間が陶冶されると、若い頃考えていたので、この話はショックであった。苦労しても、一向に人格が陶冶されないケースもあることを知ったからである。

時として、長期間の病苦・拷問・身体拘束等で、苦労した人の性格が歪められることもある。もちろん、苦難の末に立派な人格を形成した事例も多いのではあるが単に苦労だけでは、良い結果は必ずしも得られないこともあるのだ。

世の中において、人生の苦難には大いに立ち向かうことを奨励している人は多い。例えば、「幸福の科学」を標榜している大川隆法氏は、「苦難には、逃げずに立ち向かわねばならない」と著書に述べている。

しかし、問題は、苦難に立ち向かう場合の心の在り方なのである。すなわち、苦難に立ち向かう時に、どのような心の在り方、あるいは心構えであるべきなのかを述べている論者は少ない。あるいは私の知る限り、皆無に近いのである。

苦難を我慢する時に、その苦痛を抑えると、内攻して心の葛藤が生じて、良い人格形成に役立たないばかりか、人格崩壊、すなわち、性格を歪めてしまうのである。苦難に立ち向かう時には、その苦痛を意識し噛みしめ味わい更には強めれば、苦痛の解脱ができるとともに、人格陶冶に大いに寄与するのである。

これを短歌にすると、

世の苦難 立ち向かうときは 抑えずに  
苦痛味わえば 人格陶冶す

となる。